

幼児の教育

家庭-保育所-幼稚園

'97年 3月号



新保育デザイン12か月（第二集）

ワイド判

園だより・クラスだより・行事だより
文例・イラスト・囲みケイ



4・5・6・7月



8・9・10・11月



12・1・2・3月

おたよりを読みやすく、魅力あるものにするための本。

園だより・クラスだより・行事だよりのレイアウト例、自由に使える
囲み枠、飾りケイ、ワンポイントカットなどを豊富に掲載。

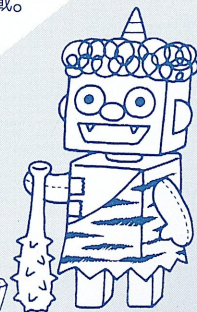
B4判なのでそのままコピーして使えとても便利。

忙しい保育者には必備の書。

おねがい



新刊



阿部 恵 編著

B4判 96頁 定価各2,136円（税別）

キンダーブックの
フレーベル館

幼児の教育

第96巻 第3号



幼 児 の 教 育 目 次

——第九十六卷 第三号——

© 1997
日本幼稚園協会

保育現場と学問の交流の中で——一九七八年・お茶の水女子大学児童学科

現職研究会の学びの中から——……………長山 篤子……………(4)

人形劇で育つ子どもたち……………小林 美実……………(10)

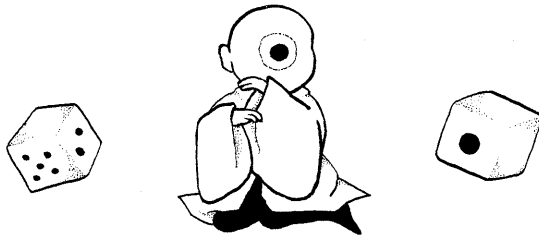
子どもたちへのまなざし②)

トイレのごみ箱に捨てられた孫娘……………松井 とし……………(18)

保育の窓(6) 保育の心……………原口 純子……………(20)

障害をもつ子どものひとりひとりに応援団を

——デイヴィド・B・シュウォルツ『川を渡る』を読む——津守 真……………(26)



場になれる……………佐藤 寛子…(33)

震災後の子どもたち(14) 結実……………森末 哲朗…(38)

ある日の育児日記から(7)……………佐藤 和代…(47)

病原性大腸菌O-157とわが家……………武田 京子…(48)

外国の文献から『心情と知性の教育―日本の就学前と小学校教育に関する考察』

第八章 よい学校とは?……………吉村 香…(54)

表紙絵／小田原千佳子

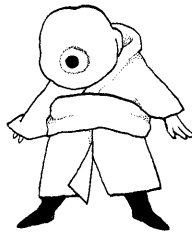
扉題字／津守 真

扉カット／お茶の水女子大学附属幼稚園児

カット／彌永たたえ「目」

編集委員／田代 和美・伊集院理子・上坂元絵里

編集部／仲 明子



保育現場と学問の交流の中で

——一九七八年・お茶の水女子大学児童学科

現職研究会の学びの中で——

長山 篤子



一九九六年第四十九回日本保育学会で企画されたシンポジウム「保育学の現在と未来」に於て、私は保育現場にいる者として細やかな提言をいたしました。提言した内容の一つとして、一九七八年に実施されておりましたお茶の水女子大学児童学科、津守真先生・本田和子先生・大戸美也子先生を中心

とした現職研究会が果たした役割とその意味について述べました。現職研究会で行われた保育実践研究が、保育者にとって大変有意義であった旨の内容でした。その内容がどのように学問体系に組み込まれ位置づけられたかといった観点では意見を述べることはできませんでしたが、少なくとも、保育者に将

来に向かつて保育に示唆を与えるものであったという事は確かであったと述べました。それは、この研究会で、子どもに向き合う時の多くの判断力が与えられましたし、保育の内容を検討する知恵があたえられたからでした。従って保育の質を高めていく上で意味があり保育実践研究が保育学に果す役割の先駆的な方向を示したと当時を振り返って省察し、これからの保育学を考える上での一つの提言として述べた次第です。

保育学会のシンポジウムでは、時間の制限がありましたので現職研究会で行われた保育実践研究がどのようなものであったかその内容に触れることが出来ませんでした。その後、この研究会に関心を持たれた方の要請もあり、改めて古い資料を掘り起こし、その一部を本誌の紙面にて数回に分けて紹介することにになりました。本格的な資料は、お茶の水女子大学児童学科研究室に残されていることと思いま

すので、私のレポートを中心に、当時学んだ事を紹介したいと思います。

この研究会のメンバーは、先に記した大学の先生方、研究室に所属していらしたスタッフ及び、幼稚園八園の代表保育者によって構成されました。そして八園の幼稚園にメンバーが一月に一度参観に行きレポートをし、そのレポートを持ち寄って研究会が持たれることになっていました。そこで検討された内容をそれぞれの幼稚園に持ち帰り、更に園内で研修会をし、保育に生かすといった方法で保育実践研究が進められました。

当時私は日幼稚園に週四日関わっておりましたので、その園を代表して、研究生としての手続きをし、この研究会のメンバーになりました。当時のレポートを紹介し、研究会で討議された内容、及びそれがどのように保育現場で用いられたかご紹介してみたいと思います。

M幼稚園参観レポート……一月二十二日(火)

半日をM幼稚園で過ごし、とても気持ちのよい安定感を持つことが出来た。子どもが遊んでいる状態を記録するより、この園の落着いた雰囲気はどこに潜んでいるのだろうか、その事についていくつかの事を考えてみた。

絵について

園の壁のところどころに専門家が描いたと思われる、おおきな絵や小さな絵が飾られている。どの絵もその場の雰囲気非常にマッチしており、この園に絵を描く人が生活していることを感じさせられた。そこで子どもの絵に関心を持ち観察をする。三歳女児がクレヨンで画用紙に絵を描いている。

M Nちゃんこんどはどの色がいいの……

N これ

二人で会話して描いている絵は、自然で楽し気なものである。先生がのぞきにくる。楽しんで描いている様子がわかる。

五歳男児がポスターカラーで絵を描いている。

一色描いては距離を置きながら、次の色を選んでいる。自分の描いたものを満足気にながめている。

五歳女児二名がクレヨンで絵を描いている。きりんを中心に描き、会話を楽しみながらそのきわにいろいろなものを描いていく。ゆっくり描き満足気ですら楽しそうであった。

園の色々な所に大人の絵、子どもの絵が飾られ、色々な所で子どもがゆっくりと絵を描いている。どの子どもも描く事を楽しみ、心を満たしているようであった。



織機について

ままごとコーナーの横に織機がある。糸巻きも一緒に置かれていた。羊毛やそれを剥ぐ道具も置かれている。コーナーの向う側は出窓になっており、冬の室内花が沢山並べられてある。それだけで温かな家庭の雰囲気満ちていた。どこの幼稚園にも見られるといった光景ではなく、ここだけで見られる光景に受けとめられた。絵と同じようにここの幼稚園の生活、文化を感じさせられるものであった。

子どもの姿から

私が所属している幼稚園の子どもの姿と、どうしても比較して見てしまう。私は毎日、子どもと出会い楽しかったり苦労したり、時には、「どうしてこんなに混乱するのだろう」と考え込んでしまう出会いを子どもたちとしている。M幼稚園でも時にはそのような日があるのかもしれないが、少なくとも今日は、子どもたちが「いらいら」している様子には

出会わなかった。年長のクラスで保育者が、『くしゃみくしゃみく天のめぐみ』（福音館）を読み聞かせている場合においても、三十五名の子どもたちが「聞く」ことにあまり集中していたので驚いた。少し気になるところでもあった。

以上が私のレポートの概要ですが他に二園の先生方の感想のレポートの一部を紹介します。

Y 幼稚園の先生の感想

砂遊びの様子を見る事が出来た。長い時間、ゆったりと砂に関わっていた。保育者もずうっとその場に一緒にいる。保育者は砂遊びの道具の整理を一緒にしたり、子どもの様子をじっと眺めたり、ことばをかけたたり、落ち着いた雰囲気であった。人も物も良く揃っていると言う印象を受けた。

A 幼稚園の先生の感想

保育者が子どもの遊びにあまり介入しないのが印

象的であった。

子どもが作ったものが丁寧に保存されていた。

一つの遊びが長く続いている。積木の一角にカウンターのある花やさんが出来た。貯金通帳まで出来ていた。外に出て色々な材料を集めてくる。花やさんに必要な材料が外に色々あった。

*

以上大変大まかなレポートの概要を紹介しましたが、他にも何園かの先生方のレポートがありました。それらを持ちより二月に、ゼミを行っておりませう。そこでの先生方の発言をご紹介しますと思いません。

大戸先生 幼稚園では、一日の中、一か月の中、一年の中、いろいろなことがあるが、長い期間の中で、それらのことが繰り返し繰り返し出てくる。それがM幼稚園の特長ではないだろうか。

A幼稚園の先生 M幼稚園の子

どもたちは、家庭で行う遊びと幼稚園で行う遊びが、異なっているのではないかと思った。遊びに大きなもり上りはなくたんたと続いている。

O幼稚園の先生 安心感がただ

よっている。やや物足りない感じがある。その原因を皆で考え合ってみると面白い。

S幼稚園の先生 どこか違ったものを感じる。子どもたち同志の規制があるが無意識に行われているように思う。

H幼稚園の先生 そこに住んでいる人の思想が感じられる。

N幼稚園の先生 びっくりするような活動が見られない。

本田先生 これまで出会ったことのない幼稚園であ



る。M幼稚園の文化を持っている。

この家の家風と言うか、芸術家の姉妹が住んでいるからであろう。子どもたちも影響されてこの家に入りこんできたと言う印象を受ける。五歳のお花やさんごっこも「花を集める」「並べる」の繰り返しが面白い。

津守先生 とてもきれいなみがかれた床が印象的である。他の幼稚園にはないような遊具が目立つ。教育主張を特に持つと言うのではなく、生活の中に子どもが入り込んでいる。これはやろうと思っただけで出来ることではない。とてもユニークである。

*

以上のようなことが、M幼稚園の先生を交えて話し合われました。M幼稚園のO先生は、このようなゼミを通して、多くの新しい事実気づいた旨を話されています。そして、自分達のこの一年の保育を

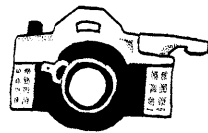
振り返って「花やさん」「お家ごっこ」がどのような行われてきたかを話されました。M幼稚園の経営者が、芸術家の姉妹であり二人がいつも子どもたちの中で、一緒に生活している様子も伺いました。

ここでのゼミをその後どのようにまとめて保育実践研究の資料にしていたか、ご紹介出来ませんが、このゼミに加わっている保育者、研究者は、それぞれに多くの学びをする事が出来ました。特に環境や雰囲気、子どもの生活に及ぼす影響について改めて学ぶ事が出来ました。ゼミに参加した保育者は各自の園にこの資料を持ち帰り園内研修の資料にしました。それぞれの幼稚園の保育に具体的な影響を与えました。大学の先生方もそれぞれのご研究の良い資料として用いられたと思います。こうしたゼミの繰り返しは、保育そのものの質を変化させていく事が出来たと確信しております。

(青山学院幼稚園)

人形劇で育つ子どもたち

小林 美実



今年の夏、幼児のための人形劇や参加劇をしてい

る仲間十六人とドイツへ行った。子どもたちの人形劇が見たい、そして一回だけ、私たちもドイツの子どもたちの前で人形劇を演じてみたい。そんな願いをドイツの友人に伝え、出発した。何といっても子どものための人形劇はヨーロッパが先輩である。

大正時代倉橋惣三先生も、ヨーロッパの幼稚園で、先生たちの演ずる人形劇を見る子どもたちの楽しそ

うな様子に感銘をうけられたとか。

先ず北ドイツのハンブルグに五日間滞在した。こゝは三十年前、半年間、私をはじめて保育の研修をしたところである。さっそく小学校で交通安全教育の人形劇があるという情報が入った。演じるのは、なんと警察の交通安全教育のお巡りさんたち。日本でも、警察や消防の人たちによる腹話術、紙芝居などがある。比較もできると楽しみにかけた。

会場はプレイルームのようなホール、まわりの少

し高くなっている所に人形劇の舞台がつくられ、中央の低いスペースに椅子がならべてある。制服を着たお巡りさんが三名、準備をしながら笑顔で迎えてくれた。いよいよ子どもたちが三三五五入ってくる。それを舞台の前の丸椅子に座った一人のお巡りさんが、「やあ、元気にしてるかい?」「手にもってるの、なあに?」など子どもたちに声をかけて迎える、しばらくの間子どもとひとしきり会話がはずんだが、そのおしゃべりの中から、八月の誕生日の子どもを見つけ出し、舞台の前で、自分にそっくりなあやつり人形とその子どもとの愉快な「なぞなぞ」の入った会話をした。子どもたちは二人の会話を決して邪魔せず、しかし何か言いたい時は手を挙げたり、タイミングうまく発言したり、お巡りさんのリードもみごとだが、大勢集まったところでの態度や発言のしかたをわきまえているらしい子どもたちにも感心した。これがこれから始まる人形劇へのプ

ロローグだった。

一回目の公演は、幼稚園の年長と小学一、二年生の約七十人。劇の内容は、「カスパー」という手遣い人形を主人公にした交通教育物である。子どもたちはカスパーと交通規則を守らない人や泥棒などとの間にくりひろげられるスピードある動きやことばの応酬に、体をゆすりことばを発して応援したり意見をいったりする。カスパーも子どもたちに質問し、意見をきく。ドイツ語がわからない私たちにも、子どもたちのワクワクドキドキしている気持ちも、子どもたちのワクワクドキドキしている気持ちもが伝わって来る。びっくりしたことは、子どもたちのことばや歓声が、決して劇の邪魔にならないことである。そしてカスパーの問いかけに対する意見の本気で適切なこと。本当に劇にすっかり入りこんでいる。また、日本の子どもによく見られるテレビ風のわるふざけや、かるがるしい発言や行動がない。他の子どもが発言している時は黙ってきいている。

二回目の公演は、小学三、四年生。もう日本では

「人形劇なんか！」という年齢である。一回目より内容が少し複雑ではあったが、交通安全教育を目的としていることでは同じである。しかしこの子どもたちは、もっと発言が多く、カスバーは時々劇の中で子どもたちと討論まではじめたのが愉快だった。

さて、人形劇の中で子どもたちが意見をいい、それに人形が答えながらストーリーが展開していくというやり方は日本では珍しいだろう。今、日本でも子どもたちが劇に興味をもち劇の世界に集中して見るようにと、積極的に子どもにはたらしきかけることが試みられている。例えば、人形や俳優の誘いで劇中一緒に歌う、「ヨイシヨ、ヨイシヨ」と掛け声をかける。「どっちに行った？」の質問に答えるなどである。ところがカスバー人形劇の子どもの参加はそんなものではない。答えるだけでなく、自分の考えを述べるのである。というとき、きつとワーワーとうるさく、人形遣いの声など聞こえないだろう（マイクは使っていない）と想像するだろう。また、あ



▲発言したい子はこうして人さし指を高くさし上げる

まり子どもの発言にかかわり過ぎて、ストーリーが進まなくなつて子どもが飽きてしまつたりしないだろうか（保育でもこういう場面がある）と心配になるだろう。ところがそんな心配は全くない。大勢が

しゃべりたい時は、みんなさっと片手を上げ、さし指をつんと立てる。その中からカスパーが「だれにしようかな!」と面白いせりふやしぐさで選ぶ。そして発言をうまく誘導したり、みんなが納得するような方法で発言を整理してストーリーが進むようにリードしていく。

どうして保育者でもないお巡りさんが、子どもに對して保育者顔負けの即興的な柔軟な対応が出来るのだろう。その都度子どもへの反応が違うだろうに……。一回目の公演の後、下手なドイツ語で質問する私たちに、お巡りさんは二回目の舞台の後で見るようにいった。「我々がどのように劇をすすめているか、みてごらん」というわけである。

舞台裏からみてわかったこと。ストーリーは決まっている。重要なせりふは、それがストーリーをすすめる上で大事なキーワードだから、必ずいう。しかしその間は実に自由に即興性に満ちているのである。舞台のけこみにふたつきの小さい穴がある

ている(日本とちがいは、舞台のけこみは高く、腕をいっぱいのにのばして人形をつかうので、遣い手はけこみの上から子どもを見ることができない)。時々、特に子どもへの反応が大きい時、そこからちょっとのぞいて子どもの様子をたしかめながら、カスパー役の遣い手が「もう少しこのまま続けよう」「さあ、先にすすむぞ」と目くばせや手や肘や時には足で仲間にサインを送る。ちょっと手がある他の遣い手も穴からのぞいては助言をする。子どもはことばを実に嬉しそうに聞き、本当に面白そうに穴からのぞいている。見ている私たちにも、心から子どもが好きで人形が好きなこの人形の遣い手たちの気持ちがよく伝わった。

このお巡りさんのグループのリーダーはカスパー役の人で、十七年のキャリアをもつ。勿論、警察官になるために警察に入ったのだが、ある時警察官に人形劇で交通安全の教育をするグループがあることを知り、そのメンバーとなったそうである。彼らの日



▲交通安全教育のための人形劇をするお巡りさん。中央がカスパー役のリーダー。下に並んだ人形達が登場人物。(舞台の裏側で)

常は、幼稚園、小学校を公演してまわる他は、人形劇の創作と練習の毎日とか。その練習量、木で彫って製作した人形（これはプロの製作者が作っている）、公演回数からいってプロといってもよいだろう。他の人形劇団と違うのは、交通教育という目的をもっていることである。

教育という目的を持ちながら、この人形劇がたいそう面白く愉快なのはなぜだろう。まず「カスパー劇」の面白さ、「カスパー」というキャラクターにあると思う。カスパーはドイツの人形劇に昔から登場する勇気があって機転がきいてユーモアのある愉快なキャラクター。昔は多くの国の人形劇の主人公がそうであったように、時の権力者を頓智やユーモアで批判しやりこめる民衆の味方の道化だった。今は子どもたちの人形劇の主人公になっているが、顔のつくりも衣裳も道化であり、その性格も潑刺とした愉快な正義の味方であることにはかわりはない。しかも好奇心が旺盛で冒険心があり、多少おっちょこ

ちよいだが、頭の回転、身のこなしや動きの速いこと。だからいたずら大好き。劇の中では子どもたちにかわってストーリーをどんどん進めていく。つまりカスパーは、子どもたち自身なのである。だから子どもたちは、ワクワクドキドキし、自然にことばが出、応援し、意見を真剣に述べるのである。昔その性格故に大衆の間で人気であったカスパーが、今は子どもたちの代弁者としてその力を発揮しているのだ。

このカスパーを子どもの人形劇として成功させたのは、今世紀ドイツ人形劇界の第一人者、マックス・ヤコブであるが、それを教育的な目的を持つ場にも登場させる柔軟さが、生真面目でおかたいと思われるドイツにあるというのも愉快だ。マックス・ヤコブのことばに「生活の中でうんとユーモアを身につけた人だけにカスパーを操ることができるということだ。カスパーの血を自分に持っていない者は、カスパーから指を離さなければならぬ」とあ

る。そうだ、子どもたちはみんなカスパーの血を持っていてなのだ。それは大人から見ると、「いたずらっこ」にすぎないだろうが。それにしても、日本の子どものための劇や人形劇に多いあの教育くさは何だろう。一見教育とは無関係なカスパーが、逆に子どもたちに大切なことをしっかり伝えることができている。

マックス・ヤコブのおかげで、この子どもたちの両親は勿論、祖父母までが、「私も子どもの時、カスパーをみた。カスパーで育った」と言う。三人のお巡りさんをはじめカスパーで育った大人には、いつまでも子ども時代のカスパーの血が流れているのだ。それが大人を子どもの良き理解者にさせるのである。数日後、カスパーではないが、十分にカスパーの性格を持つ男の子を主人公にしたプロのマリオネットをみた。大きい豪華な舞台、魔法使いも登場するメルヘンの世界は、また別の楽しさがあった。それでもなお子どもたちと問答する所が何個所

かあって、子どもたちにとって、劇中発言することで参加する人形劇がいかに自然なものになっているかがよくわかった。

人形劇を面白く気持ちいい公演にしている理由の一つに、観客である子どもたちがある。大きい障害者施設内の小学校で障害児を含む三、四年生約五十名に私たちが公演した時のことである。ことばの問題もあるので、ことばを使わない音楽によるジョー的なものを演じた。このような人形劇をあまり見慣れていない子どもということだったが、その見方のすばらしいこと。人形の動きだけでの劇的な表現にいい表情や歓声をあげて、しっかり反応するのだった。公演後のことである。「人形を持ってみたい」という申し出に、多少心配しながら（というの、日本では往々にして乱暴にあつかう子どもがいる）人形を全部出してみた。それからの子どもたちの行動は実に感動的だった。手にとると、近くの友達と人形で話しかけ、抱き合い、ゆっくりからみあう。

その中には障害をもった子どももいる。あちこちで小さい短いドラマが生まれていると感じた。この子どもたちは、日本の子どもたちのように、幼稚園や学校で発表会を目的に劇の練習を毎日毎日やらされたりすることはない。しかし、いかに日常的に劇的なあそびを楽しみ、人形劇などのよき観客になっているか、ということだろう。つまり人形劇をはじめ、子どもの文化として劇的なものがすっかり生活の中に根つき、それによって子どもたちがすてきに育っているのである。マックス・ヤコブの自叙伝を讀むと、彼が子どものためのカスパー劇を始めたころ、学校の校長をはじめ大人たちの無理解に悩まされたことが書いてある。小さい人形の劇なのに何百人もの子どもを集めたり、子どもだけ置いて先生はさっさと去ってしまうなどであるが、残念ながら日本はまだその段階である。これを子どもの文化というなら、貧しい文化だ。

日本にも、文楽をはじめ各地に伝承されている人



◀カスパーはみんなこの様に道化のかっこうをしている

形劇がある。アジア各地域にも、インドネシアのワヤンのようなすばらしいものが沢山ある。しかしそこから子どもたちのためのものを生み出すことはまだ出ていない。そこには、あそびや祭や習慣の伝承を含め、難しい問題がある。これからの、子ども文化をめぐる大きな問題だろう。

ドイツには、ミュンヘンのマリオネット劇場のような大変芸術性の高い人形劇もある。カスパーで

育った人々は、大人になってからも人形劇の面白さを堪能しているであろう。ハンブルクを離れるとき、今年の秋冬の子どもたちのための人形劇のポスターをもらった。大きなカスパー人形の絵とともに沢山のカスパー劇の演目が紹介されていた。今頃休日にはたくさんの子どもたちが、お父さんやお母さんと一緒に人形劇を楽しんでいるのだろう、その姿が目には浮かんでくる。

(宝仙学園短期大学)

※文中のマックス・ヤコブに関することばの引用は清水

俊夫訳 『マックス・ヤコブ自叙伝』(一九九六年十月

出版。本書は、人形劇団ブーク・日本ウニマ(〇三―

三三七九―三三七〇)で購入可能です)より

※マックス・ヤコブについて

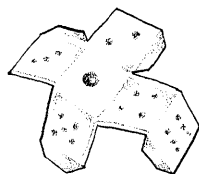
一八八八―一九六九 ドイツ生 一九五九―一九六九

ウニマ(国際人形劇連盟)会長

子どもたちへのまなざし (23)

トイレのごみ箱に 捨てられた孫娘

松井 とし



県民センターで幼稚園の先生方を対象にした研修会の受付をしていた時のこと、「三歳児から幼稚園に行かせる必要があるのでしょうか」と、年配の女性に声をかけられた。たまたま通りがかつたら、幼稚園の先生の研修会の掲示が目にとまったのだという。

傍らの椅子にかけて話を聞き始めると、その人の二歳の孫娘の言葉が遅く、他の子どものように遊ばないという悩みだった。娘の連れ合いであるその子の父親も小さい頃は「口数が少なくおとなしい子どもで、友だちと遊ぶのが苦手だったそうだ」というエピソードやまわりに小さい子どもが全くいない生活環境の話に続いて、有名幼稚園の「お入園」にからんだ話につながっていった。

ある幼稚園の入園テストに合格させるために幼児教室へ通い始めたところ、子どもが泣

いて母親から離れなかった。するとその指導者は、母子分離のトレーニングを提案したという。そこでこの人は孫娘を預かり、「まずは子どもに慣れさせよう」とデパートのおもちゃ売り場にあるブレイクコーナーに連れて行った。ところが孫娘は、まわりの子どもたちのような姿を見ているだけで一向に遊ぼうとはしない。無理に押し出そうとすると大声をあげて泣き出した。あんまり泣くのでトイレへ連れて行き、「そんなに泣く子は捨ててしまふ」とごみ箱に捨てた。子どもは「泣いちゃいけない」というおばあちゃんの要求に応えようと泣きじゃくりながら必死に頭を下げ、「ごめんなさい」をする。ようやく泣き止んだ子どもを連れて戻るが、状況は変わらない。おばあちゃんはまた腹を立てて彼女をトイレのごみ箱に捨てる。こんなことを繰り返した、という話だった。

「かわいそうだったでしょうか？」と聞くこの人に対して、私は相談の基本を忘れて思わず「それはかわいそうです」と答えてしまった。「だって泣き止まないんですもの」。最後にもう一度「かわいそうだったと思いますか？」と聞き、「私の娘も見てもらえないと言っています」それだけ言うと、その人は何事もなかったかのように立ち去った。

孫娘のことを思えばこそ、何とか有名幼稚園に入園させたいという情が、本人の気づかないうちに子どもの心を痛々しいほどに傷つけている。生まれてからわずか一千日も経っていない幼な子の「虐待」、その実態を垣間見た思いだった。

(元幼稚園教諭)

保育の心

原口 純子

研ぎ続けるものとは

平成八年八月にドキュメンタリー人間劇場「時を紡ぐ師と弟子」(テレビ東京)の再放映を見ました。これは、法隆寺金堂などの堂塔の復興や再建を果たした最後の宮大工棟梁といわれる西岡常一氏と、その弟子である小川三夫氏のいかるが鶴工舎の若き宮大工達の日常を描いたドキュメントです。これについ

ては、『木のいのち木のこころ』天・地・人編(草思社)にもくわしいのですが、人を育てるといふ視点から非常に興味深いものでした。

私は幼児教育の現場で多くの幼児や保護者、保育者、主任と園生活を共にし、昨年春から幼稚園教諭の養成に携わってみて、保育者を育てるといふことがどういふことなのかについて考えていたのです。短大で一クラス五十人の学生を前に保育についての

知識や言葉を語り掛けても、油紙の上に水をまいて
いるような空しさを感じます。例え、話をよく吸収
してくれたとしても、保育の知識を持った人にはな
るけれども、保育者を育てることにはならないので
はないかとの疑念が残ります。

保育者は技術職人ではありませんが、職能を持つ
た人を育てるという意味では、大工さんを育てる事
も保育者の養成も一脈通じるものがあります。鶴工
舎は徒弟制度で師と弟子は生活を共にして知識とし
て学ぶというより、体を通して知識も技術も精神も
身につけていく様が描かれています。建築概論や寺
社造営学を学ぶわけでもなく、親方と共に仕事をす
る中で技術も人間もまると成長します。入舎八年
目の二十七歳の若者が何人もの職人をまとめ、十億
と言われる大きな仕事の現場をまかされている様子
に驚きを感じます。中でも印象深いものは、宮大工
にとって道具は命であり、仕事の基礎は刃物の研ぎ

で、仕事をしている間は一生研ぎつづけるという事
です。刃物の研げない大工は使いものにならないと
言われて、入門した若者が、寸暇を惜しんで夜遅くま
で水場で懸命に鑄（のみ）や鉋（かんな）を研いで
いました。切れる鉋で削った表面は水を弾くが、悪
い鉋で削った表面はけば立って水を吸い腐るのだそ
うです。無駄なものをそぎ落とし、一つの目的に向
かって真剣に取り組む若者の群像が清々しく感じら
れました。

さて、保育に於いて、大工の刃物研ぎに当たるも
のとは何でしょうか。「これ」が幼児教育の基礎で、
「これ」のだめな人は保育者として使いものになら
ず、保育を続ける者が一生研ぎつづける「これ」と
は、幼児教育科の二年間に身につけるべきことも
「これ」の基礎なのです。

「これ」とは技術でしょうか……どのような技術？
知識でしょうか……どのような知識？

情熱、感性、人間性、人間力あるいは保育観、幼児理解でしようか……保育者の要となるものとは何かを考え、それを育てる手立てを考えたいのです。

感性・人間性・育ち

優れた保育者を思い起こすと、暖かく誠実な人柄のA子先生、天衣無縫な闊達さのB子先生、そこにいるだけで場が明るくなるオーラを発散するC子先生、淑々とおとなしいけれども、上品でやさしさあふれるD子先生。幼児の動きや気持ちをよく見たり感じていて、クラスの幼児が生き生きと育つE子先生。それぞれの良さがあがり、その保育者ならではの学級経営をしていたことを思い出します。これらの特性を見ると、その人固有の個性や感性、赤ちゃんの時から十分に愛されて育った、育ちの良さや人間性によるところが多く、良い適性を持った人が保育者の資格をもったに過ぎないともいえるのです。お

となしい人、地味な人、元気ではあるが雑な人、他の希望が叶わずやむなく入学した気持ののらない人、様々な学生が入学してくるのが短大の現状です。幼稚園教諭の資格を出すということは、特に適性があるとは言えない普通の人をどう保育者として育てるかということなのです。

幼児理解を身につける

研究会の紀要の今後の課題として「教師自身の感性や人間性を高めることが望まれます」などと結ばれています。やさしさや包容力や人としての魅力など、保育に当たる者に求められる究極の資質は恐らく感性や人間性なのだと思います。けれども、問題を感性や人間性という言葉に包括してしまうと、



育ちや適性の問題になり、普通の人は保育者として養成できないことになってしまいます。もちろん適性は非常に大切なことです。

人間性という漠然とした言葉を保育者養成という視点から、さらに問題をしばって見ると、「幼児理解」に行き着きます。

幼児教育を目指す者は少なくとも共感的、人間的理解を知識として知り、身に付いた行動とし、ひいては保育者としての人格にして欲しいのです。一人ひとりの幼児の立場にたって気持ち添わせて受容する理解や、幼児を暖かく見守る包容力、カウンセリングマインドなどを、まず知識として知り理解するところからスタートし、幼児教育科での生活の中から、実感として人間理解を身に付けることが望まれます。そのためには、一人一人の学生自身が教師に受け入れられる経験や、心にとめて貰っている安心感、信頼感を経験する必要があるのです。

保育者を育てるといふこと

さて、奈良の鶯工舎は今日でもなお徒弟制度で若者を育てています。生活を丸抱えにして、親方は弟子の隅々まで知り尽くしています。そのようにして、親方は弟子の能力や性格、個性に合わせて教えたり待ったり、叱ったりして人格まるごと育てているのです。

かつては、保育者の養成も徒弟制度のような時代があったのです。

昭和四十五年度をもって廃止になった、お茶の水女子大学の幼稚園教諭の養成課程も一種の徒弟制度のようなしくみになっていました。一学年が二十四名で、附属幼稚園の建物の中に居室があり、部屋を出ると幼児が廊下を駆けまわっているような生活だったのです。一年次から幼稚園のクラスに配属されて、週一日実習の日があり、担任の先生や幼児と

共に過ごし、幼児を理屈抜きに肌で感じるとするというような生活です。クラスの担任の先生は養成課程の学生にとっても指導教官のようなもので、よろず学生の相談にもついでいただき、ご指導いただいていたのです。授業は授業としてあったものの、幼児教育の原形となる保育観は、はっきり二年間の年間を通しての実習により培われたものと思われます。この二年間で幼児教育について学んだというよりは保育者として育ったと言う方が当たっています。

今日幼稚園の教諭は短大で、二年間に六十八単位を取得すれば、誰でも免許を取得し先生になることができます。幼児教育科の一学年一五〇人が幼児教育の科目を履修したとはいえるのですが、保育者として育ったといえるのは何人でしょうか。

もはや私達は徒弟制度に帰ることはできません。人を育てる徒弟制度のよさとは何かをつかむことにより、幾ばくかのヒントを得ることにします。

親方との信頼関係

少人数で、親方が弟子のことをよく知り尽くして、信頼関係があること。

一学年一五〇人もいて、五十人一クラスで授業だけで出会っているのでは、呼び出しを何度もかけた手こずる学生

か、特徴のある学生以外名前がおぼえられないのです。名前と顔が一致せずはどうして信頼関係ができません。一授業単位を二十五人以下にして、名前も顔も良く知り合って保育関係の授業は進めたいものと考えています。

現場で学ぶ

宮大工にしろ保育にしろ抽象的思考ではなく、対象に合わせながら具体的に対応する仕事です。理屈だけがわかっていても、木を使いこなすことも幼児



を援助することもできません。幼児教育科において、教育実習は最も重要な科目です。

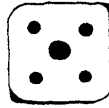
現在私どもの所では、一年次の秋に附属園で六日間、二月に学外実習九日間、二年次に学内希望実習六日間、学外実習三週間をとっています。実習を重ねる度に、学生の幼児を見る目や感じ方に、成長が感じられます。実習させて戴く幼稚園には大きな負担をかけているわけですが、現場での実習は学内の座学の何倍もの教育力を持ちます。それだけに、実習園と養成側は相互に信頼関係を持ち、十分な連携をもって、良い実習成果を上げられるようにしたいものです。

保育の心を育てる

鶯工舎の若き宮大工の映像を見ながら、幼児教育を目指す人にとって一生研ぎつづけるものは何かを考えていました。それは深い幼児理解（人間理解）

に根ざした、暖かな保育の心ともいえるものではないかと思ひ至ります。保育者を育てるということはプロフェッショナルな保育の心を育てることなのです。それらは、知識と共にそれぞれの個人的体験を通して育てられるものです。保育者の養成は、学生を教育し主体性を育て、自信をつけ、教師との密な人間関係を通して、保育の心を育て上げることです。そのためには、少人数制にクラスを作り、名前も人柄もわかって授業することが望まれます。幼児教育科で学んだ者は進路のいかんを問わず、やさしく、暖かな保育の心の灯を持っていたらすばらしいことです。

（洗足学園短期大学）



障害をもつ子どもの

ひとりひとりに応援団を

—デイヴィド・B・シュウォルツ 『川を渡る』を読む—

津守 真

障害をもつ人の福祉や教育は、この四十年間に、他のどの分野にも見られないほどの大きな変化をした。ことに米国では一八〇度の転換をしていることを、私は本誌に何度か書いてきた。その変化は社会の内部でどのようにして生じたのかを知りたいと思っていたときに、デイヴィド・B・シュウォルツ著『川を渡る』（富安芳和、根ヶ山公子訳、慶應義塾大学出版会）を読んだ。

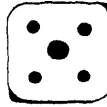
著者は、障害をもつ人達を施設からコミュニティに移すという巨大な仕事をしてきた行政官であると共に、その分野には稀な思索家である。

障害に対する観方の変化

障害をもつ人を、劣った人と見るのではなく、社会にとって本質的に貢献する人と考えることが、変化の出発点だったと言えるようである。序で述べられるように「障害についての考え方は、文化におけるより大きな世界観とかわちり絡み合っている」。

一九八五年に、少額の助成金で、障害をもつ人が町の中で暮らす試みをしたことから話をはじめまる。ひとりの障害者に対して、保険、住宅、仕事、日常生活などについて「橋をかける人」（町の有力者）を探し、協力を「お願いする」。最初は、断られるのではないかと、著者は緊張して頼みにゆくが、その人は「ひとりの人の人生は絶対的で固有の有用性と価値をもつ」（第二章）という人生観をだれに対しても抱いていることを発見する。そこから昨日まで施設に住んでいた人が地域社会の中で喜ばれる存在になってゆく。

一人の重度の障害をもつ子どもの母親が、本当に疲労困憊したとき、ソーシャルワーカーは子どもを施設に入れることを示唆した。母親は、「あの人たちは私の赤ちゃんを連れてはいっても、私が赤ちゃんを家に置いておくために必要なものをくれようとはしない」（第三章）と訴える。著者は、この母親を支援する擁護者を探す。擁護者という語は、ピープルファースト運動で用いられる“advocate”の訳であるが、日本語では、応援者と言った方が分かりやすいだろう。「この子は自宅で暮ら



せませすか？」という問いは障害を個人から切り離せない特性とみる見方である。ここで問うべきは「私たちの社会はこの子が自宅で暮らすために必要な援助を提供しますか？」ということだと著者は言う。障害に対する対策ではなくて、だれであろうと人間が幸せに生活できる場所に社会を変えていくことが福祉と教育の課題である。

何故居住型施設ではだめだったのか

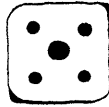
ノーマリゼーションの父と言われるウルフェンスバーガーは、「初期の收容施設の設立にはわれわれがとても理解できない誇りと希望と幸福感が伴っていた」（第五章）という。ところが、「同じ施設に長年いることによって、実際のコミュニティから孤立する。知り合いは職員だけになる。」「共に住むことは恐ろしく難しい。（同質の）人達を一緒にすると、互いに対する日常の軋轢からくる苛立ちが、互いを遠くへと押しやる遠心力として働く傾向がある。だんだん絆は弱くなり個人の情緒面での縄張り意識は極端になり……」（第十一章）そして、虐待、放置、向精神薬の過剰投与が起きる。「知的障害者は、彼らの住んでいるところどこでも、虐待され、放置されているとわれわれは明言できる」とまで著者は言う。そこから、「施設退所」の運動が、反戦運動と同じように米国全土に起こった。一九八〇年代である。しかし收容施設を閉鎖してコミュニティサービスに置き換えればいいという単純なことではない。

ネットワークの相互依存の倫理

『存在感 (sense of place) — 心理的コミュニティ感』なくしてヒューマンサービスの場所から慈しみの心 (sense of care) が生じることはありません」(第一章)と著者は断言する。つまり、福祉施設であろうと、学校であろうと、ある場所が自分らしく生きる場所にならなければ、そこは人が育つ場所にならない。従来の治療ヴィジョン、つまり、専門家によって構成された福祉教育環境には、個々の人の存在感は生まれない。コミュニティヴィジョン、つまり、「追放され、レッテルを貼られた個人を再びコミュニティの人にする事、— それには家族と友達が大きな役割を果たす」(第八章)によって可能になる。それは、個人主義的鑄型である哲学的自由主義ではなく、人間の尊厳を守る社会関係に立つ市民共和主義の考えであり、関係の倫理が追求されねばならない。それには血縁ではない自発的連携によるネットワークとそれを広げ維持する強い受容力をもつ人が必要とされる。障害をもつ人もだれでも、互いに依存し合い、助け合って生きている。それなのに「障害をもつ人々については、何故相互依存ではなくて自立がこんなにも重視されるのだろうか」(第八章)と著者は問う。だれでもが心の中に抱いている疑問ではないだろうか。

管理運営モデルではなく、人間性がダイナミックにはたらく場

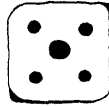
施設が大きくなると、官僚的になる。行政官である著者は官僚制とは何かを問い、



次のように要約する。「・長期間の安定性の確保 ・スキャンダルの回避 ・そのための無数の法律、規則手続きが自らを動けなくする ・変化を嫌い、変えようとする人達を不快に思う」(第四章)。専門主義もそれを助長する。「施設の欠陥を補うのに行動心理学者のコンサルタントがいなければならず、記録は保存して置かねばならなくなりました。臨床的専門的な考え方が、コミュニティサービスの中にあまりに浸透してしまつて、障害のある人と付き合う他の方法を考えることが難しくなりました」(第七章)。何故専門化を急ぐことが社会のなかでこんなにも早く蔓延するのだろうか。著者が、応援者を専門家ではなく町の普通の人求めたとき、「私の職場のだけれど、この人たちが本当にそのことをする資格があるのかと私に尋ねました。長い時間私はこのことを考えて苦しみました。結局この人たちの専門的資格は問題ではないことが、私自身に分かつて来たのです。私がこの結論に達したのは、私の心が私にそう語ってくれたからだとしか言いようがありません」(第二章)と著者は言う。人間の仕事は、個々の人の自由な行為によって創造される。政策はそれを抑圧することも支援することもできる。社会の規制が多くなると、その社会は人の使命感を奪い、規制を遵守する態度しか育てない。それはケアの場の創造にはふさわしくない。「多様性は生命現象の偉大な贈り物である」(第九章)のに、管理運営モデルは多様性を消滅させている。

行政の場の実践と理論

著者は「数え切れないほど多くの会議をし、黙想をし、何度も何度も足を運び、食事を共にし、論争し、そしてともに遭遇した難問に共に立ち向かって」（序章）行政の仕事をしてきた。この短い文章の中に実践者の汗と苦勞と喜びが読み取れる。著者は米国の福祉を一八〇度変えた行政の仕事をしながら、「われわれの先駆者たちがこの仕事を始めたころの最大級の善意と気配りのある熟慮にもかかわらず、現代の収容施設の場の展開へと至ってしまった」（第十一章）のはどうしてなのか、何度も問い直す。それですべて良かったとは言えない現実に遭遇しながらも、最初の志と体験を無にしてはならないとの考えに立ち戻る。そして「人が学ぶのは経験を通してのみにあらずです。学習が起ころはその経験を分析し、熟考したときだけなのです」（第一章）と言う。行政の分野でもこの点は保育の実践と同じらしい。経験が多いから正しいとはいえない。その経験をよく省察しなければ学んだことにならない。半世紀にわたって障害者の福祉が経験して来た、多くの痛みを伴った事実を冷静に分析せねばならない。「もはや大規模な集合的解決や運動ではない。確立された統一の見解でもない。たったひとつの心が自らの真の位置を見だし、そこから旅を始める」ことである。そのとき、「自分がいかに孤立した存在であると感じていても、生の深淵において、すべてが統合されている」（第十一章）ことを知る。人はそれぞれ多様であり、その点では互いに独自であるが、心の深みにおいて共通である。その点に目をと



めるならば、すべてが統合される。「変化をもたらそうと試みているのは、あなた個人ではない。社会そのものです。あなたはそのような変化が起こるための障害物を取り除こうとしているだけなのです」。障害をもつ子どもたちや人々の教育や福祉を孤立させてはならない。それは個人の願いであるだけでなく、社会そのものの願いである。私は著者のこの見解に賛同したい。

私共の周囲でも、障害をもつ子どもと家族に今必要なことは、ひとりひとりの子どもに複数の応援者をつくることである。障害児をひとまとめにして専門的な対策を立てることではない。程度や種類別に将来を決めて準備や教育訓練をすることもない。どんなに重度の子どもでも、ひとりの人間として応援する人達のネットワークをつくることができるならば、親は子どもを育てる希望を失うことはないだろう。

*

この原稿を書いているとき、愛育養護学校（幼児期を考える会）編『親たちは語る』（ミネルヴァ書房）が出版された。私がこの十数年親しくしてきた子どもたちの親、家族が書いたものなので特別にうれしい。

場になれる



佐藤 寛子

こどもたちの帰ったあとの保育室。ママごとコーナーに敷かれた一畳の畳に腰をおろし、おもちゃのお皿やスプーンを片付けながら、ふと思った。「たたみ、最近干していないなあ……」。

一学期、私が、二十人のこどもたちと生活をともにすることになった、この川のくみ（二三歳児クラス）は、ほとんど毎日水害にみまわれた。

ママごとコーナーでは、きれいに並べられたカップやお茶碗に、ポットでなみなみと水が注がれる。水槽の置いてあるあたりでは、「めだかさん、どうぞ」と、自分のコップに水を汲んできては、せつせつと水槽に流し入れている人。水槽に手を入れて、ぐるぐるかきまぜている人。水道付近では、ひたすら石鹸で手を洗い続ける人。その横では、お人形の洋服の洗濯が始まり、そのままいくと、お人形の入浴

タイムとなる。

当然、床や畳はびしょびしょで、私はせっせと雑巾がけをする。それを見て、手伝ってくれる人たちが、手に手にぐっしょり水をふくんだ雑巾を持って登場。

もちろん私なりに、いろいろ努力や工夫はしてみたつもりである。部屋の中では奨励されない水も、外でなら出来る。「お水は、お庭でしましょね」と、一日に何度言っただろう。庭にゴザを敷いて、お茶碗やカップを並べて、青空ママごとコーナーも一緒につくってみた。手を洗っている人には、適当なところで少し早めに、「きれいになったわね」と声をかけて、タオルでふいてあげた。水槽の位置も変えてみた。めだかのえさも一緒にあげた。心情に訴える方法から、環境を変えてみる方法、私自身の保育を省みることなど、水害対策として出来ることはしてみた。それなのに、こどもたちの大量の着替えと、大量の雑巾洗い、びしょび

しょの畳干しの仕事は、私の日課になってしまった。

「川のくみはねえ、どういう訳か、毎年そうなのよ」と、他のクラスの先生方が

声をかけてくださる。

か・わ……名前なまえのせいなのだろうか？

ある日のこと。その日は、ひどい雨模様だった。

本当にバケツの水をひっくり返したという表現がぴったりの降り方だった。何気なくふと窓の方を見たときに、思わずギョツとした。ひとつこひとりい
ないはずの庭に、確かに三つの影が過よった。

「せんせい、たいへんだよ。あのね。でちゃったよ」

様子を見ていた人が、困った顔をして知らせにきた。

「ほんとね、大変。先生、三人を呼びに行ってくる



から、みんなは、お部屋で待っててね」

「あたしも、行くー」

「いっしょにいくー」

「ほくもー」

「わたしもー」

……こういうときには、やたらと団結し、一体感のある人たちである。

この非常事態を察し、駆けつけてくださったK先生が、「ここは大丈夫だから」と言ってくれださり、私は三人のところへ走った。

さて、庭のびしょぬれ三人組は、というと、全力で走り寄ってくる私の姿を見つけ、ただならぬものを感じつつも、「せんせーい」なんて手を振ったりしている。

「こんなに雨がふってるのに、お外に出ちゃってだめじゃない。みんなびしょびしょよ」

「ふふふ。せんせいもびしょびしょ」

こういうとき、こどもは妙に冷静で、テンション

の高いのは、おとだけだったりする。

「みんな心配しているから、早くお部屋にかえりましょう」

途中で、靴が脱げたり、物を落としたり大騒ぎしながら、びしょぬれ三人組とびしょぬれの私は、やっと部屋に戻った。

「おかえりー。だいじょうぶ？」と迎えられた部屋の中で、着替えをしながら、三人の中に妙な一体感があるのを感じる。まぎれもなく、同じく雨の中を出たこの私にも、それがある。この妙な一体感、私は何年か前にも感じたことがある。

*

大学を卒業してすぐ、私は、迷わず愛育養護学校でアルバイトをすることに決めた。学生時代ここで過ごした時間、出会ったこどもたちは、私の今までの人生を見つめ直し、これからは生きていく上で大切なものとなった。もうすこし、ここで過ごし

てみたいと思った。

愛育のこどもたちもまた、水は大好きである。

愛育養護学校のスタッフとして、はじめて幼稚園で担任をもったときのことである。おさげのかわいい女の子がいた。なぜ彼女と過ごす時間が多くなったのか、よく覚えていないのだが、入学したての彼女と私は、場になれていないという部分で似ていたのかもしれない。

彼女は、よく私をシャワー室に誘った。シャワーのお湯をいっぱいに出し、肩から流す。ぬれた服を全部脱いで、裸んぼうになり、ベビーマスにいっぱいにお湯をはって、首まですっぽりとつかる。そこまですると、今度は私の足にシャワーを向ける。

ジーパンの裾がほんの少しぬれると、私は一瞬躊躇する。そんな様子を見て、彼女はちょっと神経質な顔つきになるのだけれど、かまわず今度は肩からお湯をかける。不思議なもので、ちょっとぬれると嫌

なものだが、いい加減ぬれてしまうと覚悟が出来てしまつて、かえつて楽しい気分になつたりする。びしょびしょになりながら、二人で長い間歌をうたつたり、話をしたりして過ごした。そのことがあつてから、私は、彼女の気持ちに少し近付けたように思つたし、彼女の方でも、この場で過ごす上での支えとして、私を思ってくれているようであつた。

彼女はよく物を投げた。誰もいない空中に投げることもあれば、明らかに誰かを狙つて投げることもあつた。狙われたこどもの恐怖感を思い、当然その子といっしょにいるおとなは、守りの動きをする。私は、物を投げることの危険性よりも、そういう行為が彼女の立場を不利にしていくことを思い、投げようとする手をギュッと押さえた。

そんなことがあると、かならず、シャワータイムは長くなった。

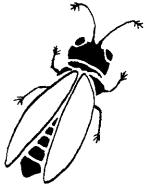
今振り返ってみると、あのときの彼女も、そして私も、あの場が自分たちのものになつていなかつた

のかもしれない。自分らしく、自分のリズムで生活する場を見つげようとしている彼女。自分の思いをどうやったら、上手うまく周りに伝えていけるかと悩む私。私たちにとって、シャワー室で過ごしたあの時間は二人の関係と、自分自身のたてなおしのための貴重な時間だったのかもしれない。

*

時に水は厄介だ。しかし、人と人、場と人との関係を和らげてくれることもある。

水に触れる、ぬれる。ぬれたことで、自分を確認する。同じようにぬれている自分以外の人、びしょびしょになった床、畳の存在を知る。自分をぬらした水と同じ水でつながっている人と場。こどもたちの執着する水に意味をもたせようとする、私の単なる憶測かもしれない



い。けれど、こどもたちは、こちらの思う以上に、新しい人、新しい場、そして日々新しい自分自身を受け入れていくことに繊細なのかもしれないと思う。

さて、最近の川のくみの水害だが、著しく減ってきている。こどもたちが、この場になれ、ちがったかたちで、自分を表現できるようになってきたのだと思う。

そんな彼らの変化（これは、あくまでもおとなの感じ方で、こどもたちにしてみたら、本来のリズムに戻れたというところかもしれないが……）を肌で感じられた瞬間を、いつも私を支えてくださっている周りの方々と、ともに喜びあえることは、私にとっても、この場で生きていく上での大きな力になっている。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）

震災後の子どもたち (14)

結 実

早いもので、あの大地震を経験してもう二年が経とうとしている（96・11月現在）。

いまもなお四万人もの人達が仮設住宅での暮らしを余儀なくされていることを思えば、丸一年経って新しい建物でニュー・どんぐりクラブをスタートさせることができたことは、ある意味では幸運なことだったのかもしれない。

森末 哲朗

阪急六甲駅近くにあるどんぐりクラブの周辺は、今もなお地震の爪痕が生々しく残されている。

六甲小学校の校門の向かいにあった文房具屋さんにはひどく壊れてしまい、どこでも学校のすぐそばには必ずあるはずの文房具屋というものが無い状態が永く続いている。



ぼくがよく子どもにおつかいを頼んでいた角の
タバコ屋は、地震当日から数えて一年半も経った
今年の夏家を取り壊し、現在工事中である。

八幡神社の近くにあったうどん屋さんは商売が
えをして、夫婦住みこみで遠くの会社寮の管理人
になった。

駅の南にあった居酒屋の主人は、地震当日、東
灘区にある自宅で火にまかれて焼死。つぎだしの
美味しい店だったが、いまはそれを作ってくれる
主はいない。

どんぐりの裏手にゆったりとした一軒家が二つ
並んでいたが、二軒とも全壊し、一軒は元の家族
が建て直してそのまま住んでいるが、もう一軒は
ワンルーム・マンションに改築され、元の住人は
六甲アイランドへ越して行った。

つらい話、悲しい話にはこと欠かない毎日が
延々と続いて来、そして現在もなお続いている神
戸。

それでも、キャンプ

95年の二月一日が「臨時どんぐり」再会の日
だった。地震から二週間後のことである。

一週間もしないうちに半分以上の子どもは「臨
時どんぐり」に戻ってきた。

どんな顔をしてやって来るだろうか、不安な
気持ちで彼らを迎えたが、どの子もいつもと変わ
りがない。安堵感と拍子抜けした気分とが同時に
湧いてきたことを覚えている。

本当に普段と変わらない筈はないのだが、ぼく
の眼にそう映っただけでも救われる思いがしたも
のだ。

その彼らが真っ先にぼくに訊ねてきたことは、
「おっちゃん、キャンプ、できる？」だった。

ライフラインの電気だけは通っていたが、水も
ガスも止まったまま。学校はいつ再開されるの
か、全く見通しがたっていない。何より肝心のど

んぐり自体が、これからどう漂流していくのかさえ見えていない時だった。

村上指導員の家を三月末まで解放してもらって、そこを臨時どんぐりにさせてもらうことになった。とはいえ、四月からどうなるのか誰にも何にも分からない、そんな時だった。

「よう、そんなこと言うとするなあ。事態がまるで解ってないんちゃうか」、そんなことをまず思っただが、いま考えれば彼らは彼らなりに事態が解っていたのかもしれない。

先の事を考えるのがとても億劫で、半年も先の八月のキャンプのことなどとても考える余裕がなかったほかに、「ぜったい、やれ」と、尻を叩いてくれていたのかもしれないからだ。

テント発、キャンプ

95年の三月二十七日から、灘区内の都賀川公園で「テント学童クラブ」を始めることになった。

ある意味では毎日がキャンプ生活のようなものだったから、「キャンプ中にキャンプに行く」ような気がしたのだが、子どもたちの強い希望で本場に七泊八日のキャンプが実現することになった。

神戸から車で約二時間半の距離にある大屋町の「おおやスキー場」が目的地だ。もう八回目ということもあって、すっかり顔馴染になったスキー場の皆さんは、我々を本場に暖かく歓迎してくれた。大屋町の自然もまた「地震のことなんか忘れて、思う存分楽しんで下さい」と、語りかけてくれているようだった。

どんぐり史上最少の人数で迎えた八度目の長期キャンプの一行の中に、青木悠一郎という二年生も「お客さん」として混じっていた。

三重県の桑名市に彼は住んでいて、どんぐりの二年生Ⅱ石川奈実子のいとこにあたる子だ。

日常の中での付き合いは全くない子だが、どん

ぐりのキャンプに参加させたいという話を受け、人数が少ないということもあったので、「よかったらどうぞ」という運びになった訳だ。

ナタで指を切ってしまった

キャンプ中の〈衣〉〈食〉〈住〉は、可能な限り子どもたちに担わせるという目標でやっていて、三度の飯、洗濯、掃除は全て彼らまかせにしている。

もしもごはんを炊き損ねたら、おとなの我々も喰えないということになるので、周囲の期待も大きいし、その分子どもたちの張り切りよりも特別のものがある。ぼくは、見事に飯を炊きあげた時の子どもの、あの誇らしい顔を見るのが大好きだ。

三人がカマド係に選ばれ、それぞれ一升釜で米を炊く。いつの間にか子どもたちは、カマド係のことを「師匠」と呼ぶようになり、マキ割り係の

ことを「弟子」と呼ぶようになった。マッチひとつすることができない一年生から見れば、米を研ぎ、火を起こし、炊け具合を見ながら火加減をし、きれいに炊きあげる高学年の師匠達は尊敬的だ。

青木悠一郎は、弟子の仲間入をすることになった。

大きな丸太をノコギリで挽いたり、挽いた薪をナタで割ったりするのが弟子の主な仕事で、それはそれで重要な仕事なのだ。

その最中、しかも初日、悠一郎はナタで左手の人さし指をザクッと切ってしまった。

傷は骨まで達していたようだった。急遽、車を走らせ、小一時間かけて八鹿病院に運ぶことになった。幸い、骨を切断してはいなかったが、神経が元通りつながるかどうかが心配ということだった。

どんぐりに毎日来ている子には、小さな庭だけ

れどそこでナタの使い方などを教えている。だからキャンプ地では殊更にナタやノコギリについては教えたりしないでやってきたが、特別参加の子にはそれなりの対応が必要だったのだ。そこがすっかり抜けてしまっただきな怪我をさせてしまい、ぼくとしては申し訳ない思いで一杯になってしまった。

初日は傷の縫合、翌日からガーゼ交換などがあり、悠一郎にとっては毎日一度の病院通いが日課になってしまった。群れから外れて、運転手役の横山さん以外に誰もいない車中は退屈でもあり、心細くもあったようだ。

「誰か、ついてきてほしいな」と、悠一郎。「よし、おれがいったる」と、名乗りをあげたのは当時三年生のさとし。仲間と一緒にワイワイやっている方が楽しいに決まっているが、さとしは悠一郎のエスコート役を買ってでた。途中で「誰か、今日ぐらいは、かわってよ」とも言わず、一週

間、毎日毎日長いドライブに付き合ってた。

悠一郎も一つ歳上のお兄ちゃんこの親切には感じ入ったのだろう、「さとし君、さとし君」と慕うようになっていった。

キャンプに同行していたおとなたちは「さとし君で、すごい子やね」と、いつもはふざけてばかりのさとしを見直したようだった。

ぼくも心底すごいやつやなと思った。

本当に痛いのは肉体が受けたダメージだけではなく、そのことのために皆からとり残されることだ。転んだ子がいたとして、その子を置き去りにする集団だったら、転んだ子は物理的な痛みと、孤立感という心の痛みとを二重に味わわなくてはならない。「だいじょうぶか」と、手を差し伸べてくれる子がいれば、残るのは転んだ痛みだけ。

悠一郎が「もう、桑名に帰る」と言わずに、包帯を巻いた手で八日間のキャンプを最後まで通せたのは、ひとつにはさとしのかいがいしい兄貴ぶ



りがあったことだったし、付け加えれば、他の子たちのさりげない思いやりだった。両手を使わな

◀ 95年8月 包帯姿で昼食をとっている悠一郎



ければ出来ないことが日常の中にはいくらかもあるのだが、「その袋、かしてみい」と、彼から袋をとりあげ、破いてから中味を彼に渡すというようなことを、ごく自然にやっていた。

96年のキャンプで

悠一郎の傷は長い期間の中で癒え、心配していた神経の方も無事に通うようになったことを、キャンプの後、手紙で知った。

それから一年が経ち、96年のキャンプを迎えることになった。

「悠一郎、くるかな？」と、さとしたちは気に掛けていた。

「もう、こりごり」と思っているかもしれないし、子どもが「行く」と言っても、「危いから、やめときなさい」と親が否定すれば、小学三年生とおとなとの力関係では大概の場合、子どもが負ける。どんぐりの子は彼らなりに、ぼくはぼくな

りに気に掛かっていたが、悠一郎は参加するという知らせが届いた。

「よう、来る気になった」と、彼に拍手を送りた
い気持ちと、「よくぞ、来させて下さった」と、
彼の両親には頭を下げたい思いが同時に湧いてき
たことを覚えている。

96年はテントからではなく、新居のどんぐりか
らの出発になった。

彼の仕事は今年も「弟子」ということになった
が、さりげなく見ていると、ナタには手を出そう
としない。

一度だけ「やってみるか」と、促してみたら
「いい」と、拒絶が返ってきた。やはり前年の恐
怖が残っているのだろう。

一日、二日と日が過ぎてゆき、八日間のキャン
プも残すところ三日というところまで来てしまっ
た。

どうやら、ナタを使うという宿題は来年に持ち

越されそうだなと思い始めた六日目、悠一郎はそ
の夜の日記に「ぼくは、今日、カマを使ったよ」
と書いていた。

子どもたちを寢床に就かせてからのおとなの
ミーティングの際に、彼はどうやら挑戦する気持
ちを捨てていないようだ、ナタは恐れけれどカマ
なら使ってみようと勇気を出したようだ、という
ような報告をした。

子どもの親や大学生や常連たちで編成されたス
タッフたちは、大いに喜んでくれた。

とりわけ、悠一郎の怪我を一番近いところで目
撃してしまった大学生の逸見君は、「よかったー」
と、胸をなでおろしていた。というのも、「ぼく
がそばにいなから」と、誰よりも大きな後悔を、
彼はしていたからだ。

毎日の病院通いに運転手として付き合ってくれ
た横山さんも、「そうか……」と、ニンマリして
いた。

ついに、ナタを握った

「朝、悠一郎がナタをさわって
いました。それを見てよっしー

(よしひろ)が『そうとちが
う』と教えはじめ、次にさとし
も教えてくれて、細いのを割っ
ているところにへんちゃん(逸
見君)が来て、本格的に教えて
もらい、いっしょうけんめい
やっていました。横山さんも

『悠一郎、やっとするのか』と見
ていて下さり、多くの人と喜びを共有できてうれ
しかった」

これは毎夜スタッフに書いてもらう日誌の一文
で、悠一郎の伯母にあたる石川照子さん(どんぐ
りの現三年生⇨奈美子の母)が「カマ」の翌日に
書いたものだ。



▲96年8月 マキ割りをしている悠一郎

一人一人の子どもに、それぞれの課題があり、
それを避けているのか、くぐりぬげようとしてい
るのか、毎夜のミーティングで話し合ってきたこ
とが、ものの見事に結実した。

もしも悠一郎の前年の怪我のことも知らず、こ
のキャンプ中での彼の迷いやためらいも想像が、つ

かなければ、この光景は単に三年生の男の子が薪を割っていただけの風景に映ったことだろう。

眼に映る現象の内側にある心の動き、これが見えてこそ「子どもと関わった」と言うことができのだろう。その意味ではこの石川さん、横山さん、逸見君、見事に悠一郎と関わり、残すところあと一日となったキャンプの最終日に果敢に自分への挑戦を果たした彼の姿を見て、嬉し涙がこぼれそうだったことだろう。

薔がパッと開いて花になる瞬間を目撃する人間は少ない。

それを目撃できた人、目撃した人から話を聞くことができた我々は幸せ者だ。

*

巷では「震後」が笑いや涙を包みながら進行している。

ぼく個人のことになるが、職場であるどんぐり

が全壊、近くの両親のアパートが全壊、自宅は半壊と、ぼくの抱えていた総てのものが被災した。

それぞれがようやく立ち直るのになつぷり一年はかかったが、親父は「壊れていく」一方で、今年四月に九十一でこの世を去った。痴呆が加速していく中で。

重い時が流れていったのだ。心はいつも灰色だった。

でもそんな中で、「おっちゃん、キャンプ、できる？」と、青い空に向かって走ろうとする子どもたちがいた。はっと気がつくぼくは、「そりゃそうや。空は灰色より青い色がええに気まっつる」と、ひとり納得する。

来年はこっちから子どもたちに訊いてみようか。「ことしも、キャンプ、できる？」と。

(六甲学童保育所どんぐりクラブ指導員)

ある日の育児日記から

(75)

佐藤 和代



子供服はほとんどおさがりかバザーで調達しているわが家ですが、今ちょっと、圭と有の 코ートを新調しようかと考えています。というのも、圭が着ているコートは紺色とダークグレー。なぜか男の子からのおさがりをよく頂くので、気にはなりつつ、そのまま着せています。有のコートももちろん、黒やダークグリーンという暗い色ばかり。でもこのあいだ、保育園の近くで軽い接触事故があったのです。ちょうど私も有の迎えの時間。何か騒がしいな、と思ったら、年長組の女の子が頭をおさえて泣いていて、周りには人ばかり。聞け

ば、お母さんより先に外に出て、路地にしゃがみこんでいたところに、バックしてきた車があったのだそう。周りはおもう暗くて、子どもがしゃがんだりしたりしたら、歩いている人にだってよく見えないのです。バックする車の運転手さんになって、絶対見えっこない。ちょっとぞっとして、隣にいる有を見ると、黒いコートを着てちょこんと立っている。これじゃ、しゃがまなくなっちゃって暗やみに溶けてしまうわね。

有は手をつないで帰ればいいけれど、圭は学童保育所から一人で歩いて帰ってきます。せめてコートは目立つ色を着せよう……と、救急車が去っていく音を聞きながら思いました。



病原性大腸菌

O1157とわが家



武田 京子

今年の夏、岡山県邑久町や大阪府堺市で発生した病原性大腸菌O1157による食中毒は、子どもを持つ母親として無関心ではいられないものでした。

学校給食がその感染源であることが判明するにつれ、学校の給食はどうなのか、学童保育の手作りおやつや麦茶はどうなのか、というような心配は心を

かすめました。今にしてみれば「対岸の火事」への心配に過ぎなかったように思います。

「まさか、九月も末の肌寒くなった時期に……」「盛岡市にいくつもある小学校の中でどうして緑が丘小学校が……」

「よりによって家の子が最初の感染者の十五人にな

るなんて……」

かかりつけの小児科の先生（学校医でもある）からの「お宅のお子さんの便からO-157が検出されました。後ほどお電話下さい」という留守番電話に残されたメッセージを聞いたときの率直な感想でした。

その一週間ほど前、先輩にあたる東京の幼稚園の先生を附属幼稚園にご案内したときにO-157は話題に上っていました。保育活動に様々な影響が出ていること、例えば園児たちが楽しみに育てたミニトマトやスイカを子ども達に食べさせることが出来なかったとかお弁当の前のテーブルの準備のための消毒薬に気を使うことなど、をお聞きして、「何かことが起こってからの対応よりもやはり予防策が大切ですね」と話し合ったばかりでした。盛岡市のO-157集団感染については、十一月六日原因究明専門家検討会議によって最終報告が出され、学校給食は三学期を目標に施設・設備の改善が行われ

ており、一応最終段階を迎えたと考えられます。そこでわが家のO-157騒動の顛末についてご報告したいと思います。

九月二十五日夕方、いつものように学童保育に子ども達（S小五・T小二）を迎えに行った帰り道、Sが腹痛を訴えました。消化の良いあっさりした食事にして様子を見ていると便通があり、「普通だったよ」という報告でしたが、念のため消化薬を飲みせ早めに寝かせました。

けれども翌朝、「おなかが痛い」となかなか起きできませぬ。数年前、精神的な理由からの腹痛を起こしたことがあるので、そちらの理由も考えましたが、父親に様子を見てもらうと、「おなかが痛くて歩けないけど、学校へは行く」と申しますので少し安心し、学校へは送っていくことにしました。学校で保健室の先生とお会いし、お話しするうち、同じような症状の子どもが昨日も数名いて保健室は忙しかったことがわかってきました。

その日の午後、Sから電話があり、クラブ活動を休んで帰宅したことで下痢をしたことの報告があり、診察を受けました。

「もしかして、僕、O-157なの？」と聞くSに、「一回だけの下痢でしょう？ O-157だったら、ずうっとトイレから出てこれないくらいひどいって……」。

新聞に連載されていた関連記事の記憶をたどりながら話していた時もまだ、わが家にとってO-157は「対岸の火事」だったのです。「念のため、便の検査をしておきましょう」と別室で検査を受け、「冷たいもの食べちゃダメよ」と薬剤師さんに言われて帰宅しましたが、顔色も良く通常通りの長男でした。

翌二十七日、Sは「時々、少し痛むけど大丈夫だよ」と登校していきました。職場の同僚の先生から「どうやら食中毒らしいから（小学校で）緊急役員会が開かれるそうよ」という話です。昼には長男の

担任から緑が丘小学校でO-157が発生したと電話連絡があったこと、給食はパンと牛乳だけで午後の授業はないことなどの連絡が父親からありました。夕方、学童に迎えに行きますと「O-157なんだって。夕方のテレビのニュースに出るから見なくちゃ」などと二人ともはしゃいでおりましたが、帰宅後、留守番電話のメッセージを聞いたとたん、長男は表情を失い無口になってしまいました。

私たちも、何をどうしたら良いのか、わからなくなってしまいました。それぞれの学年の緊急連絡網で明日の説明会には必ず出席するように、と連絡があり、さらに、保健所からも「消毒の方法の説明や色々お話しを伺いたいけれどお宅の場所がわからない」という電話が入ってきます。この日は中秋の名月でしたが、お団子を作る約束や週末に父親と子ども達が秋田の祖父母の所へいく予定は取りやめになりました。

この一か月間の行動の調査、消毒の方法、家族全

員の検便の説明をして保健婦さんが帰ったのは、八時過ぎており、とりあえず担任の先生に連絡を取りました。「O-157は指定伝染病です」という保健婦さんの説明から、「学校はおやすみさせた方が良いのでしょうか」というわたしの質問に対して、「お医者さんの指示に従って下さい。何があってもこのことが原因でS君が嫌な思いや悲しい思いをしないように教職員全員でバックアップしますのでご安心下さい」と仰って下さいました。そのときには混乱状態のためピンと来なかったのですが、後に帯広市において小学校教員の対応が問題になったことを考えると、感染者の気持ちに沿った先生の対応は



とてもありがたかったと思います。さらに追いかけるように、「明日の学校での説明会では生徒全員に検査容器を渡しますので、そのときにはS君の分を必ず受け取って下さい（後で返して下さればよいですから）」という指示まで戴きました。

二十八日、朝刊にはO-157のニュースはもちろん載っていました。原因として、①学校給食②学童保育③地域のお祭りが考えられる、とあり、なぜことさら学童保育が取りざたされるのだろう、まるで家の子が原因と指摘されているような、イヤな感じがしました（学童からは入院者六名のうち二名がいたためと考えられます）。

説明会には殆どの家庭から保護者が集まり、校長先生・保健所長・教育委員会関係者からの説明を聞いた後も熱心な質疑応答が行われました。きょうだいが通っている保育園から、当分の間登園を差し控えて欲しい、といわれたが、教育委員会からその必要はないことをちゃんと言って欲しいという要望に

対するあいまいな教育委員会側の答えに、校長先生が筋道を立てた助言をする場面があり、保護者達全員は校長先生に対する信頼感を高める結果になりました。学童保育の説明会でも同様の説明がありました。共通していたことは、原因の究明はとても大切だから何を置いても急いでするが、誰がもとで（病原菌が）広まったというような考え方はしないで欲しいと言うことでした。0-157に関しては、感染した人もしない人も誰もが被害者、たまたま、疲れがたまっていて抵抗力が落ちていたために発病したのだから、このことを原因にして「いじめ」等が起きないようにということが中心でした。

感染者を特定しない配慮は行き過ぎと言うほど徹底し、何気なく「まだ休んでいる人いるの？」等と聞くと、「そういうことは言っはいけないことになっているんじゃないの」と逆に子どもの方から注意されてしまいました。学校や学童保育という集団の中でのリーダーのあるべき姿を知らされたような

気がします。

これに比べてわが家の長男に対する対応はひどいものだったと思います。「よりによって、こんな時に間の悪い、行き足をかけるようなことばかりする」と自分たちの都合を優先して、言っはいけない言葉を投げつけてしまったのです。Sはますます言葉少なくなり、スーッと自分の部屋に引き上げてしまったのです。いつもとはちがう長男の様子に、はっと我に返り、善後策を考えました。私は、土・日、全面的に子どもの世話を引き受けられない予定があり、夫婦で時間を割り振りして、学校と医者と保健婦さんへの対応にあたりました。

父親は、小児科の受診後、大阪大学や岡山大学のホームページから0-157に関する情報を集めてきました。消毒や予防についてはもう既に保健所や



学校から配布されていたので、メンタルケアについての情報が役に立ちました。病気のメカニズムを正しく理解すること、感染した子どもには責任はないことを知らせること、過敏な不安定な状況にあるので内省的に処理できず問題を抱え込んだりしがちであることが書かれていました。

「ちゃんとお医者さんにかかって、きちんと手や下着の消毒もしているから誰にも移すことはないから大丈夫。おまけに、Sは学校をお休みしてもいいんだから、自分から言わない限り誰にも気づかれないうもの」と励まし、おしゃべりなTにはしっかりと口止めをしました。これがSへのメンタルケアになったかどうかは良くわかりませんが、夜には担任の先生からも電話を戴き気持ちに落ちつきを取り戻したようです。

後日、Sに「O-157にかかったと知ったとき、どういう風に感じたの？」と尋ねると、「僕ね、死ぬんだとおもった」という答えでした。堺や邑久の

ニュースから、「O-157はこわい病気で、かかったら死ぬ」と思ってしまったのでしょう。「……ではないでしょうか」という憶測を情報源に、「原因は学童保育か地域のお祭り」等とかかれてしまうと、学童保育の存続や子供会活動への影響が危ぶまれます。報道の責任についても考えさせられました。

わが家では消毒薬は台所の隅にあり、O-157は過去のことになりましたが、給食の再開まで毎日のお弁当の献立に悩まされそうです。生活科で収穫したさつまいもも本来ならばふかし芋にしてみんなで会食したのですが、少しずつ持ち帰って家庭で調理して味わうことになりました。

(岩手大学)

外国の文献から

『心情と知性の教育』

—日本の就学前と小学校教育に関する考察—

第八章 よい学校とは？

吉村 香

学校が生徒に配慮すればするほど、生徒は学校教育の問題にふつかる（トーマス・サージョバンニ『道徳的リーダーシップ』より）。

日本の子どもたちは、誰もが最善の努力によつ

て自らの役割を果たすことを教えられる。それは近代日本の成功の基礎的精神であった（デボラ・ファローズ）。

学校は子どもの社会的・道徳的発達を形成する

場である。そして賞罰もしくは何が正しいかを示すことで子どもを動機づける場である。学校はすべての子どもに平等な（時として規範的な子どもにより多くの）リーダーシップを与える。そして忍耐・努力・友情など全員が達成可能な目標を共有する一方、子ども同士が競合する場でもある。我々はよい学校というと学術的達成度で定義しがちだが、それは子どもも社会的・道徳的発達に比べれば二の次なのである。

日本の学校は社会的・道徳的発達を

促しているか？

日本の学校は学術的達成度を強く求められる。では子どもも社会的・道徳的発達についてはどうだろうか？ 非行や中退、自己破壊的行為は社会的・道徳的発達を損ねた青年の代名詞となっているが、そのような子どもの数は、日本は他の先進国に比べて少ない割合を示している。日本の非

行は他の先進国より穏やかで数少ない”ともいわれているのだ。

学校に関する問題

いじめ・落ちこぼれ・不登校・校内暴力などの問題についてアメリカの教育者たちは自国の状況を楽観的に評価しているが、日本の教育者は日本の現状に強い懸念を抱いている。こうした問題の多くは小学校から始まっており、受験の圧力が下位学年の方向へはたらいっている事実と関連があるといわれる。

学校嫌いのため年間五十日以上欠席している不登校の中学生は、日本では一九六六年から一九九〇年までに三倍以上に増え、一〇〇〇人中七・五人にのぼっている。同じ時期に小学生の割合は二倍に増加したが、その数は一〇〇〇人中一人にとどまっている。

アメリカのある小学校長が言うには、児童数四〇〇、八〇〇人の小学校では一人以上の不登校児

童がいても珍しくないそうだ。一〇〇〇人に一人の不登校児童の存在を深刻に考える日本とは大違いである。つまり両国の統計を直接比較しても、さほど意味がないことになる。数字のもつ意味が異なるからだ。

しかし日本の不登校児童の約四十パーセントが通学できるカウンセリングセンターに出席していることで、不登校児童の統計に加算されていないことを考慮すると、日本の実態は統計上の数値を上回る事がわかる。

校内暴力

総務庁の調査によると、一九八〇年代半ばから小・中・高校ともに校内暴力の件数は端的に減少している。それは教師たちの自覚と介入の効果も含まれている。ただ我々が残念に思うのは、統計では知ることのできない校内暴力が多く存在することである。

校内暴力は中学生に最も多く、また大規模校は

ど頻発している。小学生では教師の介入を要する事件のうち、校内暴力は十六パーセントで、仲間はずれ・からかいが多くを占めている。

自虐行為と非行

日本の未成年者のうち逮捕された経験のある者は、アメリカの四分の一と統計では割合が低い。だが他の統計によると日本の青年たちは、不法な薬物には手を出さなくともある種の自虐行為にめり込んでいるという。一九九〇年に警察がシンナーで補導した未成年者は二万二〇〇〇人以上だそうである。

殺人は、アメリカの十五〜十九歳の少年が犯した件数は、日本のそれより三倍である。三〇〇〇人の日本の高校生に調査したところ、彼らは中国



とアメリカの高校生に比べて、ストレスや学校の成績への不安、攻撃性、鬱などの感情を報告することが少なかつた。

また、日本は十代の妊娠、中絶の割合が世界でもっとも低いとされている。しかし日本人の十代の若者の約六十パーセントが、男女の性的関係をもつことについて「適切な避妊をすれば認める」と解答しているのである。

学校への要望

日本の子どもたちの問題が、諸外国に比べて統計上低い割合なのは、日本の学校教育の特徴でもある。日本の幼稚園、小学校を観察すると皆、子どもの意欲、かかわり合い、活動における役割に注目する。

日本の五、六歳児の八十パーセント以上が、幼稚園に満足していると述べている（これに対して日本の中学生は約六十パーセントしか同じ回答をしていない）。同様に、四、六歳児の約八十五

パーセントが自分は幸せだと回答した。NHKの調査では、四、六歳児の半数以上が何一つ心配も問題も感じていないものの、四人に一人は学校入学試験に、また約八パーセントが暴力に不安を抱いているという。

“中国・日本などアジアの小学生はアメリカの小学生より学校を好み、満足している傾向がある”と指摘したのはステイブンソンらである。土田は日本とアメリカの四歳児を比較研究し、日本の幼児の方がより幼稚園を好んでいると述べた。

まとめ

日本の教育は小学校ですら問題を抱えている。校内暴力・不登校などが新聞や雑誌で大きく取りざたされているのが現状だ。そして、ほとんどの問題は中学で急増している。そのため教師たちの間で中学校の改善を要求する声が高まっている。

殺人は、国際比較データによれば日本はアメリカより割合が低く、頻度は下降傾向にあるように

ある。

日本とアメリカは社会状況が異なるため、一方の小学校が他方より優れているとは言いきれない。多くの場合、日本の学校で有効な教育方法はアメリカには適さないのである。しかし幼稚園の場合日本の教育方法と、アメリカで知的・社会的発達を促しているときれる幼稚園の教育方法は酷似している。実際、子どもの社会的・道徳的発達を日常の実践で個々に応じて開化させようとするアメリカの幼児教育者は、日本と同様の教育方法を用いているのである。

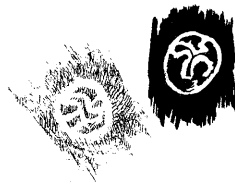
子どもの要求に合致すること

「学校が子どもの要求に合致すると、子どもは学校のことを懸念する」というのはアメリカでのある研究成果である。所属・自律・能力は子どもが学校に親しむのに重要な基本的心理学的要求である。

所属の要求は、子ども

もの親密で支持的人間関係にかかわる。この人間関係とは西欧や日本で人間発達の理論として一般的な、子どもの情緒的・社会的発達の基礎である。我々のみる限り、日本の小学校では様々な方法で人間関係を助長している。教師は家族的な小グループで、子どもたちが快適に話しやすい雰囲気をつくっている。

自律の要求は、子どもたちがコントロールされていると感じることや、責任や圧制的な制限から自由であることを指している。日本の学校は様々な方法で子どもの自律を促している。すべての子どもが順番でリーダーシップをとるように配慮している。また教師による評価より自己評価を、大人に管理されるより自己管理を強調しているの



ある。

能力の要求は、達成感にかかわる活動を追求することに つながる。子どもは他者から報酬を受けなくとも自発的に世界を探究し、感覚を養おうとするものである。

日本の学校では子どもの考えに則って、興味深そうな作業に子ども自身がかかわることで活動が展開される。例えば第七章で紹介した水に浮かぶボートづくり、理想のあそび場の設計、学校めぐりなどである。このような活動は、固定化した基礎スキルに焦点化した教育的世界よりも、子どもたちの能力の要求に合致しているようである。

つまり日本の幼稚園と小学校では、自律・所属・能力という基本的な要求に合致した多くの物質を備えている。そして逆に、子どもたちは学校や学校で強調している価値観を懸念しているようである。

アメリカでの日本の実践の限界―状況の考慮

筆者はアメリカの教育実践に、考え方の素材として日本の実践を取り入れることを肯定していない。理由は次の二点である。第一に、日本の実践はアメリカの価値観から離れていること。第二に、日本の実践はアメリカにおいては実践的でないことである。

子どもの状態

日本の子どもはアメリカのある研究者に言わせると、「特権的世界」に生きているという。乳児死亡・栄養不良・虐待・両親の薬物依存・貧困などの問題に照らすと、日本の子どもは他の先進国に比べても大変恵まれている。家庭に困難のある子どもをどのように教育するか、という悩みは日本の教師は滅多に抱くことがないが、アメリカの教師の多くが抱えている。つまり食物・住居・大人

の注意などの子どもの基本的要求に関して、日本とアメリカでは重要度が異なるのである。

日本の学校では教育実践の目的は安定性・大人と子どもの（または子ども同士の）信頼関係を発達させることにある。日本の教師たちは、アメリカのように多くの子どもが不遇の家庭環境にあるとしたら、それでも教育技術を駆使することができるとか。日本の幼児は、幼稚園で物質的環境づくりをされ、不適応行動も許容されることで、服従とは異なる形で人間関係を形成しているのである。

カリキュラム

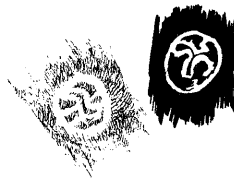
日本では国により統一されたカリキュラムを実践している。現に筆者も、三つの小学校で非常に似通った「母親の仕事」という一年生の授業を見た。どの授業も母親の仕事を二十四時間観察する宿題を課していた。三人の教師が示した実例は異なるし、子どもたちも異なる活動（描画や作文）

に従事していたが、基本的な内容は母親の仕事に対する適切な見識と評価、手伝いのあり方を認識させるものであった。

概して日本の教師は

どの教科も、重要な一つの目標や探求すべき問題点を追求している。詳細なマニュアルがあるので、教師はそこから重要な概念や知識を選出する必要もなく、子どもの関心や動機の所在すら考えなくていい。

アメリカの教師は標準的なカリキュラムを巧妙に解釈して用いるよりも、独自のカリキュラムと教材を創造することが求められ、逆にそれが教育に有害となることもある。独創性に欠けると教師は非難され、標準的な授業は、たとえ技術的でもよい評価を得られないのである。



以上二つのモデルは、技巧的で革新的な教師によるもので、東西の異なる文化を反映している。

教師の地位

日本とアメリカの家族を対象に行った比較研究で、日本の親たちは子どもを放任していながら權威への敬意を強調していることがわかった。日本の教師は、そのような權威尊重の文化に支えられてアメリカより楽に仕事をしている。

おそらく教師の立場（地位）と權威が確固としていれば、日本のように子どもと温かく親密にかかわり、教育愛と「子どもと共にあそぶ」心をもつのが容易なのだろう。

評価

日本の小学校では算数・社会その他の教科で単元の終わりに児童が重要事項を身につけたかどうかテストする。それは、教師自身の授業のあり方をテストすることでもあると言う教師もいる。多くの教師は市販のテストを用いているが、国から

課されたテストもある。

まとめ

本章では、日本で行われている授業をアメリカに応用するのを困難にしている両国の小学校教育の違いを探求した。日本の子どもは万全に守られ、教育を受けている。教師は統制された綿密なカリキュラムに支えられ、安定した地位を約束されている。彼らは知的発達のみならず社会的・道徳的発達をも重視する国家カリキュラムに支えられているからだ。

このような違いを前提に、我々は日本からどのような授業を学べるのだろうか。最も妥当なのは、日本の学校が子どもの社会的・道徳的発達に専心している点に注目することだろう。教師が多くの時間を費やして子ども人間関係形成と共通目標を分かちあうことに苦心している点である。

また日本の教育が単に、子どもの社会的・人間的成長発達にのみ重点を置いているのではなく、

知的な面も追求している点も学ぶべきことである。しかも子ども同士の競争を煽るのではなく、授業その他すべての活動において、子どもの社会的・人間的・知的発達を目的とする計画がなされているのである。

子どもの内なる要求に合致するという問題は、アメリカで最も成功しているといわれるプログラムでも主眼とされている。日本の学校でも、所有

全体のまとめ

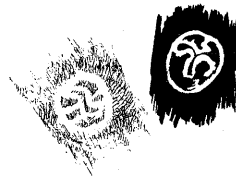
以上第一章から第八章をふまえ、次のことを結語としたい。

日本の企業が成功する秘訣は、短期の利益より長期の目標に焦点をあてることだそうである。日本の

・友情・自尊心・探求
といった子どもの内なる要求に應えるための鍵を見出している。

今後我々は、何を求めて子どもを育ていくべきなのだろうか。

教育にも同じことがいえそうである。子どもが時間にかけて価値観を内面化することを、即時の従順より重視し、責任ある学習者となることを来年のテストの結果より重んじることが、成功の秘訣



であるようだ。

アメリカの教師たちも教育の長期的目標とそれを達成する条件、すなわち子ども同士の協力関係や意味あるカリキュラムと援助を強調したいと考えている。だがアメリカの教師は長期的目標に必要なクラスの雰囲気、責任やスキル獲得への関心が損ねることに気づく。アメリカの教育は歴史的に、知的発達と社会的発達という両極の間を揺れ動いてきた。

その点日本の幼稚園と小学校は、振り子を揺らす必要がなかったといえる。友情・所属・親切などの目標を知的発達と融合させられる条件が揃っていたからである。学校は競争によって子どもを動機づけるよりも、自己批判的反省や目的共有の感覚を子どもに養わなければならない。すべての子どもは教師の熱意に触れたり、他人に貢献できることを喜ぶ経験の方が賞罰よりも大きな喜びなのである。

このような教育の実現には、広いビジョンが必要となる。学校教育が知的発達のみならず社会的・道徳的発達をも形成し、三つの側面の発達を助長するために意図すべきだということに理解あるビジョンである。例えばよい理科のカリキュラムは科学的概念の習得と同様、子ども同士の協力や科学への独創的な関心を喚起するものである。

またこのビジョンは、子どもにとって親密で支持的な人間関係が、決して快適なばかりではないことにも理解がなくてはならない。これは子ども社会的・道徳的発達の本質である。活気ある学習における苦しい作業の本質でもある。

日本の幼児教育はその長所・短所ともに、アメリカの教育を見直す大きな手がかりをあたえてくれる。

編 集 後 記

三月。卒園・入学を控えた子どもたちの心の中には、どのような模様が描かれているのでしょうか。

我が家でもこの年末、長かった一人っ子生活に別れを告げる時を迎えた娘が、期待と同時に様々な不安を抱えて毎日を過ごしています。兄弟を待ち望んでいただけに、この間の喜びと張り切り様は大変なものでした。でもだんだんとその現実が迫ってくるにつけ、それは今の生活を失うことにもなることに気付き始めました。折りに触れては「こうやって二人で（三人で）ゝできるのも、あと何回あるのかな」としみじみと言うようになってきました。母が入院

する二週間という時間への不安は最も大きく、十二月に入り、カレンダーを一枚めくると、いつの間に書いたのでしょうか、そこには大きな字で「ママにゆういん（たぶん）」という書き込みがありました。

新しい状況に直面する前の漠然とした不安は、傍らにいる者にも分かりにくく、支えにくいものです。でもやはり、支えようとする人がいてこそ、その状況を持ちこたえ、乗り越えていけるのでしょう。今月号を読んでみると、そのような大人の姿勢が、共通して垣間見られ、励まされている自分に気付きます。

「私大丈夫だよ。頑張れるから」毅然とした態度でそう言うようになったこの数日の娘の姿は、本誌に執筆して下さる方々のおかけのような気がします。

(田)

幼児の教育

第九十六巻 第三号

(一九九七年三月号)

定価四五〇円(本体四三七円)

発行 平成九年三月一日

編集兼発行人 田代和美

発行所 日本幼稚園協会

〒112東京都文京区大塚二―一―

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

〒108東京都港区三田五―二―

株式会社 フレーベル館

〒113東京都文京区本駒込

六一―四―九

☎〇三―一五三九五―一六六一三(営業)

☎〇三―一五三九五―一六六〇四(編集)

振替 〇〇―一九〇―二―一九六四〇

☆ 本誌ご購入のご注文は発売所フレー

ベル館にお願いします。

☆ 万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。

倉橋惣三選集（全五巻）



倉橋惣三・著

わが国の幼児教育の理論を確立した倉橋惣三の教育論・随筆などを集大成した定本です。今でも保育界においては読まれ、語り継がれて保育者にとっては座右の書。

- | | |
|-------------------|--------------|
| ①幼稚園真諦・子供讃歌・フレーベル | 定価3,398円（税別） |
| ②幼稚園雑草 | 定価3,398円（税別） |
| ③育ての心・就学前の教育他 | 定価2,913円（税別） |
| ④保育案他 | 定価3,398円（税別） |
| ⑤児童教育・教師論・児童文化他 | 定価3,398円（税別） |

上製本各巻ケース付き B6変型判 416～512頁

キンダーブックの
フレーベル館

創業90年・キンダーブック創刊70年記念出版

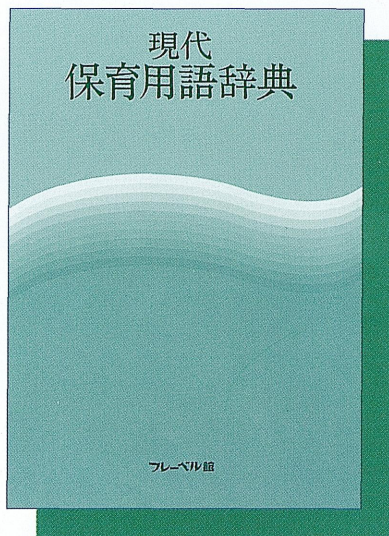
弊社は明治40年、幼児教育・保育への寄与を目指して東京・飯田橋の地に誕生しました。以来、皆様のご支援をいただきながら今年創業90年を、また、昭和2年誕生の「キンダーブック」は創刊70年を迎えることとなりました。

この創業90年・創刊70年を記念し、21世紀を視野に入れた情報源・知識源『現代保育用語辞典』を企画いたしました。新しい時代に対応する常備書として、皆様のお手もとにご用意いただければ幸いです。

基本的な保育用語約2,000語を精選、50音順に配列し、解説。

現代 保育用語辞典

付録：外国の保育教育40か国



保育を語る時に欠かすことのできない基本的な用語、新しい保育観・子ども観から出てくる言葉などを通して、これからの保育のあるべき姿を分かりやすく示す辞典。みだし語は英語訳付きで、今の保育に直結する語釈をポイントとし、引きやすく、意味がすぐ確認できる辞典。

編集委員

岡田正章・千羽喜代子・網野武博
上田礼子・大戸美也子・大場幸夫
小林美実・中村悦子・萩原元昭

執筆者

保育及び隣接分野の
最高権威者330名が参画。

好評発売中

A 5判・592頁・定価7,767円(税別)

キンダーブックの
フレール館